第28回 | The 28th Annual Meeting of the Japan Society for Biological Therapy

日本バイオセラピィ学会学術集会総会

Back to Virchow, 宿主の炎症病態に迫る

プログラム・抄録集

会期 2015年12月3日[木]・4日[金]　会場 川越東武ホテル 〒350-1122 埼玉県川越市脇田町29-1

会長 柴田 昌彦 埼玉医科大学国際医療センター消化器腫瘍科

05-4

進行癌患者に対する低分子フコイダン（LMF）の抗炎症作用に関する探索的検討報告

医療法人社団医創会　セレンクリニック福岡[1)]、医療法人川口メディカルクリニック[2)]、
医療法人喜和会　喜多村クリニック[3)]、堂島リーガクリニック[4)]、特定医療法人誠仁会　協和病院[5)]、
統合医療センター　クリニックぎのわん[6)]、西本クリニック[7)]、医療法人康陽会　花牟禮病院[8)]、
真島消化器クリニック[9)]、九州大学大学院　システム生命科学府[10)]
高橋　秀徳[1)]、川口　光彦[2)]、喜多村邦弘[3)]、成宮　靖二[4)]、河村　宗典[5)]、天願　　勇[6)]、西本　真司[7)]、
花牟禮康生[8)]、真島　康雄[9)]、照屋輝一郎[10)]、白畑　實隆[10)]

背景：フコイダンは海藻から抽出される高分子硫酸多糖であり、特に低分子化された「低分子化フコイダン」には抗癌、抗酸化、抗炎症効果等を含む広範な生物学的活性が報告され活発な研究材料となっている。その効果から幾つかの製品化フコイダンが散見される。当クリニックの癌治療経験の中で、抗癌剤＋樹状細胞ワクチンと並行して、低分子フコイダン（LMF：Low Molecular Fucoidan）を自主的に服用していた進行性膵臓癌患者において、急速な腫瘍縮小と同時にQOLの改善に加え、C反応性蛋白(CRP)の値が劇的に改善したケースを経験した。これを契機として、進行がん患者に対するLMFによる変化として、特に抗炎症作用に着目して探索的に評価した。方法：オープンラベル・多施設共同・前向き臨床研究として倫理委員会での審査承認後、2014年1月～2015年2月の間に、さまざまな癌腫の進行・再発癌患者に対して、同意のもと4週間にわたってLMF（商品名：パワーフコイダン）を服用してもらい、投与前後（0・2・4週目）でのバイオマーカー（血算、高感度CRP、リンパ球サブタイプ、各種サイトカイン）の推移について評価した。なお、免疫機能検査は健康ライフサイエンス社に依頼した。結果：対象患者は全20名。評価期間前後1ヶ月間において、血算・高感度CRP値・リンパ球サブタイプについてはいずれも有意な変化を認めなかったものの、サイトカインのうちIL-1β、IL-6、TNF-αのいずれもが当初2週間で有意に減少していた（p＝0.01、0.03、0.03）。考察：本研究は、進行癌患者に対する低分子フコイダンの抗炎症作用について観察した初めての臨床研究報告である。あくまで今回は探索的に対象群設定なしにて実施したが、さまざまな癌腫が混在するにもかかわらず、炎症性サイトカインがわずか2週間で有意に減少していたことは興味深い。フコイダンが抗癌剤治療に伴う副作用の軽減に寄与することは、すでに経験的かつ前向き臨床試験においても報告(ONCOLOGY LETTERS 2011）されており、LMFによる短期間での炎症性サイトカイン抑制作用が抗癌剤の副作用軽減に寄与している可能性が示唆された。今後、抗癌剤治療中の患者に対する支持療法の一つとしてのLMFの臨床的意義について、より詳細に検証されることが望まれる。